

開催地名	愛媛県八幡浜市
開催日時	令和6年1月19日（金） 14：00 ～ 15：50
開催場所	八幡浜市文化活動センター
語り部	山縣 嘉恵 （宮城県東松島市）
参加者	自主防災組織、学校関係、社会福祉関係 135 名
開催経緯	当市では、南海トラフ地震の発生が危惧され、発生した後の被害は甚大とされている。八幡浜市自主防災会主催の八幡浜市防災訓練を毎年実施しているが、参加者の顔ぶれはほぼ同じ人となっている。また、自主防災会を中心に、地域の防災力向上を図っているが、活動内容や参加率は各地で温度差がある。そのため、南海トラフ地震に対する備えを高め、女性や子どもに優しい避難所運営や、女性視点での防災活動に対する知識を高めたいと考える。
内容	『備えとまちづくり』 ～被災した宮城県東松島市の事例から～ （1）東松島市について 2005 年 4 月、鳴瀬町と矢本町が合併し東松島市に。その 4 年後に、まちづくり基本条例が整備され、市民協働のまちづくりが始まった。当時は地域自治組織と、地区自治会制度を進めるために準備が始まった。東日本大震災後、完全に地区自治会制度へと移行。それにより公民館から市民センターに変更になり、地域避難所として地域自主防災組織の拠点としても使用されることとなった。 （2）あの日のこと 海岸から 600 メートルの位置にあった自宅は津波で流失してしまった。10.35 メートルの津波第一波は、全てのものを飲み込んでしまった。家族全員無事であったが、ただ逃げただけであったため、今では『あの状況では、ああすれば良かった。このようにするべきであった。』などと過去の経験を基に以下が挙げられる。まずは自分の居住区での被災時における避難場所を、選択肢として幾通りも知っておくべきである。実際に津波がやってくると普段、一般的に候補に挙げられている避難所、例えば公民館などは平地にあることが多く、津波からの避難の際には避難所として利用できないケースが多く見受けられる。 次に個人での防災意識向上が必要不可欠であるということ。家の中の地震対策や家具の固定、高いところに極力大きな、重たい物を置かない。また避難時には、待たせない、戻らないことも重要な事である。そして、やはり普段から地域の方と挨拶などコミュニケーションを欠かさず取っておく事。いざという時に、全く見ず知らずの赤の他人に助けてもらえるほど、被災時に全員が冷静でいられるとは限らない。みな自分

	の事を守る事で精一杯である可能性が高いからである。そして何より家族間で平日頃から、避難時にはぐれてしまった場合には最終どこに集まるのか、最悪の場合にはどうするのか、などを共有しておき繰り返し意識することが大切である。 最後に、被災時に命を落とさないためには、どうしたらいいのか。防災訓練などで実際に津波が起こった事態を想定、緊張感を持って行えているのだろうか。避難所として考えられる小学校、中学校校舎の2階以上（より高いところ）に避難する訓練を、日頃から学校と地域とが連携して活動・実践できているのだろうか。などと、事前に対策を講じることが可能であり、それを疎かにしてしまうと、身近の大切な人たちが避難時に取り残され、行き場を失ってしまう。 (3) 逃げたあとの避難生活について 発災直後の避難所は、安否確認が大変であるが何よりも重要である。そのとき役に立ってくれるのが女性の情報網である。『〇〇さんは、〇曜日は〇〇の病院に行く日だからここには居ないかも。』や『〇〇さんは、今息子さんのところに居る。』などを含め、諸々運営に関して課題点はあるが、やはり平日頃から地域住民同士が顔を合わせておく事が大切であると考え。交通安全見守りや夏祭り、そういった催しでも、この辺りにはこういう家族がいる、と互いに知り合う事が大切である。日頃からコミュニケーションが取れていることで、長い苦痛な避難所生活の中でも揉め事が少なく心的ストレスの緩和などが見込める。また避難後、衛生面の配慮と工夫、情報共有の大切さも考えていかなければならない。このような事から、少しずつの日々の備え、隣人、地域の方との日頃からの関係性の積み重ねが大切である。  
開催地より	「そなえとまちづくり～被災した宮城県東松島市の事例から～」という演題で、発災後の緊迫した行動や避難所生活から学んだことについて、わかりやすくお話しいただいた。地域のつながり、人とのつながりの重要性を再認識できた。自主防災組織の活性化、自助・共助の体制強化につなげていきたいと思う。